

留学・研究計画書

氏 名 中井 潤子	留学機関名 東南アジア諸国教育省連携機構歴史・文化・伝統地域センター
留学先国名 ミャンマー	留学期間 西暦 2004 年 6 月 ~ 2005 年 6 月
研究テーマ (留学目的) ビルマの南アジア系ヒンドゥー教徒の「セカンド・インディア」という語り — 移民社会に見るオーセンティシティの構築 —	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>グローバル化が進む中、「越境」した生活者のアイデンティティ、生活する上での権利や法的位置づけなどの問題が盛んに問われ始めて久しい。移民に関しては、経済的要因から見ていく視点や、社会的権利に関してエスニシティの視点などから論じられてきた。本研究で扱うビルマの南アジア系移民は、19世紀後半イギリス植民地政策によって移住した。1947年ビルマ独立、1964年社会主義化の際、その多くが本国へ帰り、今もビルマに居住する推定30万人の南アジア系の人々は、本国と分断されて独自の生活世界を築いている。ごく限られた、政府とも繋がりのある富裕層が本国への渡航が可能であるが、残りの多くの人々がビルマの中に設定した聖地に巡礼に行き、慣習を維持して暮らしている。</p> <p>上座部仏教徒が大多数を占めるビルマにおいて、結婚などの問題から、イスラム教徒は反感を集めているが、ヒンドゥー教徒は仏教との教理の共通性を主張することで共生を図っている。しかし、ビルマでは南アジア系の人々は、ヒンドゥー教徒であっても <i>kala</i> という蔑称で呼ばれ、2段階に分かれる市民権などの面でも不利な立場に置かれているといえる。現在ビルマに居住する南アジア系ヒンドゥー教徒は、実業家層がまとめ役となり、厳しい政治状況の中、ビルマ政府などとの交渉の窓口となって、ヒンドゥー教・文化を維持している。本研究では、彼らが「セカンド・インディア」と呼ぶヤンゴン市近郊ズィヤワディ市周辺の農村地域と、その地域から首都ヤンゴン市に進出した人々に焦点を当てる。彼らについての詳細は、修士課程での調査の成果としてまとめ、既に雑誌に掲載した[過去の実績(4)]。彼らは、本国との繋がりを新たに築き始めている。</p> <p>彼らは、ビルマに居住するヒンドゥー教徒の間では、最も「インドらしい」人々だとされている。他のヒンドゥー教徒の第1言語がビルマ語となり、ヒンディー語などの母国の言葉が「良くできる外国語」に変わりつつあるが、3万人もの人が集住するこの地域は、ビルマ語が流暢でない人や、ビルマ語を話せない人が大多数を占める。言語能力にはジェンダー差が見られ、生業を通してビルマ人と接点のある男性の方が、ビルマ語が堪能であり、家庭で家事に従事する女性の多くは、本国の言葉であるビハール語とヒンディー語のみで生活している。他のヒンドゥー教徒がどんどんビルマ社会の中で分散していく中で、この地域はビルマで最も「オーセンティック」なヒンドゥー教徒の地だと語られ始めている。</p> <p>1980年代以降、この地域出身で、ビルマの実業家で成功を治める人が現れ始めた。彼らは主に豆類をインドに輸出している。その際、同じ「インド人」であるというアイデンティティを共通項として、経済的な関係をインドと構築し、成功を治めた。彼らが自分たちの生まれた地域を「セカンド・インディア」だと語ることに、二つの意味が考えられる。1に、国内のヒンドゥー教徒の中で指導的な立場に立つこと、2に、本国インドとの関係を築きなおして、経済的利益を生むことである。彼らは独自にオーセンティシティを構築することで、本国との関係を築き直し、商業的利益に還元しているのではないだろうか。経済ネットワークがグローバルに発達してきているが、その中で構築されたオーセンティシティが一つの「武器」と成り得ることが、この事例から考えられるのである。</p>	

成果報告書

記入日 2006年 4月 4日

氏名 中井 潤子	留学先国名 ミャンマー	所属機関 東南アジア諸国教育省連携機構 歴史・文化・伝統地域センター
研究テーマ：ビルマにおける南アジア系ヒンドゥー教徒の「セカンド・インディア」という語り —移民社会に見るオーセンティシティの構築—		
留学期間 : 2004年 10月 ~ 2005年 12月		
<p>私は、ビルマに居住する南アジア系移民の中の、ヒンドゥー教徒に焦点を当てて、研究を行ってきた。彼らは主に、19世紀後半の、イギリス植民地政策下で移住した人たちの末裔であるが、独立以降のビルマの政治状況の中、独自の文化を築きつつある。移民社会の中で、独自のオーセンティシティが構築されていく様子を明らかにすることを目的として、現地調査を開始した。</p> <p>しかし、私が留学している間に、ビルマは政治的な大きな変化を、経験することになった。留学を開始した時には、首都ヤンゴン市以外の農村調査も可能であったが、2度の短期調査の後に、教育大臣が突然解任されたことによる政策の転換から、それは全く不可能となった。また、2005年5月の爆弾テロや、10月に極秘裏に始まった首都機能移転など、政治的混乱が続き、いまだに先の見えない状態の中にある。その中で、当初の調査予定地であった、ズィヤワディ市に長期滞在することが不可能となったため、ヤンゴン市の中で、移民社会のオーセンティシティの構築についての研究を行うこととなった。</p> <p>私が調査した結果、得られた成果の独自性は、次の通りである。南アジア移民研究は、盛んになってきているが、ビルマに移住した移民の本格的な研究は為されていない。1964年の社会主義化以降、研究者の長期滞在は、極めて困難であったため、人類学的な研究は、ほぼ皆無であるといえる。今回、貴財団の援助により、可能になった調査によって、世界でも全く明らかにされていない新たな情報を、収集して提示することができた。</p> <p>次に、移民研究の中には、本国との関係に焦点を当てたものや、ホスト社会との同化等に対象をしぼったものは、多くある。だが、ヒンディー語とビルマ語の2言語を使用し、本国とのつながりと、ホスト社会ビルマからの影響の両方の視点から、対象を精査することができた、今回の研究は、極めて斬新なものといえるだろう。その成果を、以下に具体的に示す。</p>		
<p>1 調査の概要</p> <p>調査は、東南アジア諸国教育省連携機構歴史・文化・伝統地域センターに所属して行った。首都ヤンゴン市にある、ヒンドゥー教組織や、ヒンドゥー寺院に通う形で、その構成員にインタビューを行い、行事にも参加して、データを収集した。</p>		

2 ビルマの社会背景

ビルマは多民族国家であり、多宗教国家である。しかし、最新のセンサスである1983年のデータによると、9割近い人々が、自分は仏教徒であると、回答している。主要民族であるビルマ族が、概ね仏教徒であり、さらに、様々な形でのビルマ化政策 (Burmanization) が行われている。その影響で、「仏教徒であることがビルマ人であること」であるかのような、言説が生まれているため、実際の仏教徒よりも、センサスに表れる仏教徒の方が多いのではないかという指摘が、常に為されている。

ビルマ族は、上座部仏教徒である。仏教徒は、現世に生きている間、功徳を積み、良い来世に生まれ変わることを願う。寄進による積徳行為は、一つの権威となり、個人の社会的地位の上昇にもつながる。最近のビルマにおいては、軍事政権が民衆の支持を得るために、盛んに寄進行為を行っている。また、ビルマ社会においては、仏教の価値観が、人々の生活の隅々にまで、浸透しているといってもいい。

私が調査の対象としたヒンドゥー教徒は、歴史的に仏教と同じルーツを持つ。ヒンドゥー教の前身であるバラモン教の宗教改革として生まれたのが、原始仏教である。そのため、根本的な考え方に、多くの共通項を持つ。ヒンドゥー教徒の多くは、センサスでも仏教徒であると答える。そのような社会状況の中で、ビルマのヒンドゥー教は、仏教の影響を受けて、変化していつていることが明らかとなった。

3 ビルマにおけるヒンドゥー教の仏教化

ビルマは、1948年に独立する。その際、多くの南アジア系ヒンドゥー教徒は、本国へ帰還した。ビルマに、残留して居住することを、選択した者たちは、1953年に、ビルマ政府の指導により、全ビルマヒンドゥー中央委員会を設立する。それは、全てのヒンドゥー教徒が所属し、全てのヒンドゥー教の宗教組織と、ヒンドゥー寺院を網羅したもので、それらを統括する性格を持つものであった。宗教ごとに、マイノリティを管理する、政府の意図を汲んだ組織である。

その中の一つである、サナータナ・ダルマが、実際の活動の中心となって、1956年に仏陀展覧会が行われた。ヒンドゥー教徒の団体が、仏教についての展覧会を催すという、極めて特異なものであった。それが、ビルマのヒンドゥー教への仏教的要素の混入の大きな機会となる。次に、今回の調査において得たデータによって、仏教的要素が大きく混入したヒンドゥー教の状況を示したい。

ヒンドゥー教徒は、仏教寺院において、僧侶への寄進を行う。また、雨季の間に、僧侶に袈裟を寄進するワーゾー・ティンガンという祭りは、先述のサナータナ・ダルマの主催によって、盛大に行われる。そのときの様子を記述する。

この祭りは、1993年から現在まで、12回続けられている。ビルマの仏教徒にとっても、重要な場である、ガバーエー・パゴダにおいて、2005年8月30日に行われた儀礼には、ヤンゴン管区長、副宗教大臣など、政府高官が出席したため、厳重な警備体制が敷かれていた。彼らは、ビルマ族であり、南アジア系のヒンドゥー教徒と民族も宗教も、入り混じった状態で儀礼は進んでいった。

儀礼の手順を見ると、まず、ガヤトリ・マントラというヒンドゥー教のマントラを唱えることで始める。次に、仏教の僧侶が、説法を行う。次に、寄進が行われる。まず、ビルマ族である政府高官が行い、次に、主催者であるサナータナ・ダルマの人々が行った。終わると、教団の重職者が、組織の活動内容について、説明を行った。そして、全員で、ミンガラー・トウと呼ばれる仏教の護教を唱える。水をかける儀礼を行ったのちに、仏教の三帰依文を唱え、ヒンドゥー教のシャーンティ・パートというマントラを唱えて、閉会する。このように、見事に仏教とヒンドゥー教の混交した儀礼の内容となっている。

ここで、注目されるのが、ミンガラー・トウと呼ばれる仏教の護教である。これは、ビルマの仏教徒であるならば、誰でもそらんじることができる重要なお経である。それを、ヒンドゥー教徒は、自分たちの言葉に書き換え、仏教徒と、共に唱えることができるようになっている。

仏教の古典を記す言葉は、パーリ語である。ヒンドゥー教の古典を示す言葉は、サンスクリット語である。これら二つの言葉は、類似し、近い関係にある。ミンガラー・トウは、パーリ語のお経である。しかし、先ほど述べた仏陀展覧会で、ヒンドゥー教徒もそらんじることができるよう、サンスクリット語に書き換えられ、ビルマのヒンドゥー教徒の間に広まっているのである。

仏教徒の持つ本には、このお経はパーリ語で記載されているが、ヒンドゥー教徒の持つ本には、サンスクリット語で記載されている。こうすることにより、ヒンドゥー教徒は、自分たちが正統であると認められる形で、仏教徒と共に儀礼を行うことが可能になるのである。

このように、ビルマのヒンドゥー教は、ビルマで大勢を占める仏教に、適応する形で、変化を遂げてきていることが、調査により明らかになった。

ヒンドゥー教は、多神教である。また、ヒンドゥー教のヴィシュヌ神は、数多くの化身を持っている。仏陀も、ヴィシュヌ神の化身であるとされている。ビルマのヒンドゥー寺院においては、必ずと言っていいほど、仏陀像が飾られている。時には、その寺院の主神である、ヒンドゥー教の神像よりも、大きな仏陀像が飾られていることもある。

そして、ビルマ系の仏教徒や、中国系の仏教徒も、ヒンドゥー教の寺院に、参拝に訪れる。このように、ヒンドゥー教と仏教の類似性を強調し、教理の共通性を見出す努力が、ビルマのヒンドゥー教徒の中では、続けられ、それによって、仏教が大勢を占める、ビルマ社会の中で生きるマイノリティとして、生存することが可能になっていっていると、言えるだろう。

4 サナータナ・ダルマ二つの呼称

次に、ヒンドゥー教徒が、ヒンドゥー教の知識をいかに伝達しているかを、本国との関係をもとに、示したい。ここでは、特に最近熱心な活動を行っているサナータナ・ダルマを中心にヒンドゥー教徒の再生産の過程と、宗教知識の再生産を明らかにする。先ほど述べた、仏陀展覧会を中心的に行ってきた組織でもある。

この組織の活動の柱は五つである。1、シャーカー、2、仏陀展覧会、3、セーワーサダン（サンスクリットの学校）4、出版部、5、ダラム・シクシャー（ヒンドゥー教の教育と試験を行う機関）である。

1のシャーカーは、身体的な訓練を伴う青少年への宗教教育である。ヤンゴン市では、日曜日に、男女に別れて行われている。そこに子供たちを集めて、宗教歌を教えられたり、身体的な訓練を受けたり、簡単な宗教教育を受ける。そこでは、優秀な子供を見出し、次代を担う宗教指導者として育てていくということも行われている。ただ、実際の活動の運営にあたっては悩みがあるようで、普段通っている学校のテストが近くなると、子供たちの参加率が極めて低くなる。運営する側は、明確な意図を持ち、次世代を育てようとしているが、受け手の側には文化教室の一つという感覚で来ている子供も多く、両者には大きな意識の差が見受けられる。2、の仏陀展覧会は、現在は活動が停止されている。3のサンスクリットの学校では、孤児を集めてサンスクリットを教えている。費用はビルマだけでなく、本国のRSSのメンバーからも寄進されて賄われている。その中で優秀な者は、さらにスポンサーがついて、ムンバイのサンスクリットの学校に留学した例もある。4の出版部も、現在は定期刊行物は出版禁止となっている。今特に活動が盛んなのは、1のシャーカーと、5のダラム・シクシャーである。

5のダラム・シクシャーの活動は、ビルマ語で書かれたヒンドゥー教の基本に関する教科書を使って、子供たちにヒンドゥー教を教え、一年に一度試験を課している。3月にビルマの学校では、テストが終わり、4月、5月は休暇である。その間に、ヒンドゥー寺院等を借りて、そのテキストについてもとづいて授業を行うのである。このヒンドゥー教教育の特徴は、ビルマ語で教えていることであり、ヒンドゥー教の知識が、ビルマ語で書き換えられ、流布していつている点である。また、この活動もビルマの学校のカリキュラムの合間を縫う形で行われる。それほどに、ビルマ社会で生きていかなければならない子供たちにとって、学校の試験は重要である。

教科書は、初級、中級、上級に分かれていて、上級の試験に合格すると卒業である。つまり、3年から5年ほどで皆が卒業するのであるが、現在ビルマのヒンドゥー教の知識は、このような形で子供たちに受け継がれていつているのである。

調査において、このサナータン・ダルマは、ビルマ社会には知られていないが、本国と密接に結びつく組織であることが明らかになった。サナータナ・ダルマは、1950年に設立された組織である。設立者であるディール氏は、以前、インドにおいて、インドのRSS（国民義勇団：ラーシュトリーヤ・スワヤンセヴァクサミティ）でパジパイ前首相と共に、学んだという。その活動においては、次章で扱うが、実は、ヒンドゥー教徒たちは、この団体のことを内輪ではRSS（国民義勇団：ラーシュトリーヤ・スワヤンセヴァクサミティ）と呼ぶ。ヒンドゥー・ナショナリズムを掲げ、インド人民党の後ろ盾となっている宗教団体である。

設立者のヘッドゲールと、ゴールワルカルの顔写真を、サナータン・ダルマの設立者として、いたるところに掲げ、RSSと類似した活動を行っている。

「我々はRSSとは関係がない。RSSは政治団体であり、私たちは宗教団体である。RSSからは、そのメソッドだけを受け継いだ。」と、幹部の一人は話す。

このように、この組織は、二つの名前と、二つの顔を持っている。インドに対しては、ヒンドゥー・ナショナリズムを普及させる RSS であり、ビルマの中では、仏陀展覧会を開く仏教の布教に熱心な団体という顔である。これは、ビルマという仏教が特殊な位置を占める社会において、宗教マイノリティが生き延びていくための一つの適応戦略であると、見ていただろう。

5 ヒンドゥー寺院と祭司

次に、ヒンドゥー教を伝えていく、祭司の組合と、ヒンドゥー寺院の役割について報告する。まず、祭司の組合が生成された過程を述べると、ヤンゴン市のシュリーカーリー寺院の 4 人の祭司のうちの一つであるパラムシワンが設立した。彼によると、キリスト教の聖職者も、仏教の僧侶にも、協会があり、政府が把握しているのに、ヒンドゥー教徒にないのはおかしいという。ヒンドゥー教徒のことも、政府は知らないといけないのではないかと。他に設立を要請するような、何かがあったかと思われるが、それは、まだ調査者は明らかにできずにいる。

主な活動は、水曜日の午後にヤンゴン市のアローン地区にある事務所に集まることである。早朝 5 時頃に開くヒンドゥー寺院は 12 時前にはどこも一度閉められる。そして中休みを経て、15 時から 17 時頃にもう一度開かれて、夜の参拝が 21 時か 22 時頃まで続けられる。ヒンドゥー寺院が開いている時間帯は、祭司は中に居て、参拝者が捧げる儀礼を助けなければならないので、それを避けて集会が持たれ、そこで話し合いが行われるのである。議題は、時によって様々である。大きな集会が近づいていけば、その話であるし、寺院での揉め事や、祭司間の揉め事についても、多くの時間が割かれて話し合われる。また、如何にヒンドゥー教の知識を伝えていくかも、そこで話し合われているのである。

また、近年、祭司が経済的な成功を治めていることも明らかになった。ビルマでは、占いや厄払いが熱心に行われる。シュリーカーリー寺院には、占いや厄払いのためにヒンドゥー教徒以外の、仏教徒たちも多数訪れている。祭司は手相を見ることができる。また、シュリーカーリー寺院に参拝して、祭司にココナッツを割ってもらえば、子宝に恵まれるという噂が流れ、特に中国人街の中国系仏教徒たちが多数訪れている。この寺院の祭司は、霊験あらたかな存在として、有名になり、ヒンドゥー教徒以外にも、多くの寄進者が寄進をしている。寄進されて累積したお金を資金として、祭司の一人であるマノーシュはヒンドゥー寺院で功德を積むために燃やす蠟燭の販売を始めた。それにより、ますます収益を上げて、彼はシュリーカーリー寺院の中にあてがわれた部屋を出て、外にアパートメントを購入した。モゴは、商売を始めたわけではなかったが、寄進されたお金でアパートメントを購入した。さらに、バグワーンも累積した資金で、乗り合いバスのオーナーとなり、そのバスからあがる収益を手にするようになった。そして、同じくアパートメントを購入した。3 年前、調査者が初めての調査を行った際には、他の寺院の職員と同様、10 ドル前後の月収で暮らす人々であった。しかし、宗教知識を独占する祭司が、それをもとに、経済的な成功を治めた。ビルマでは軍事政権が続き、民主化への希望が全く見えない状況が続いている。その中で人々は、より宗教的知識を求め、それを有するものが栄える要因を、社会が内包しているといえるのではないだろうか。

6 まとめー移民社会におけるオーセンティシティの構築

私が今回の調査で得たデータの一部を、ここまで示してきた。ビルマの政治状況により、当初の計画を大きく変更せざるを得なかったが、これまでの先行研究にない、現在のビルマのヒンドゥー教徒の実態をデータとして、提示できたものと思われる。

ヒンドゥー教の知識は、ホスト社会と本国の影響を同時に受けて、変化している。また、それは、現在のビルマのヒンドゥー教の「正統」な知識とされ、オーセンティシティが構築されていっている。今後は、博士論文の執筆や、投稿論文の形として、この成果を発表し、社会に還元していきたい。



ヤンゴン市最大規模のヒンドゥー寺院であるシュリーカーリー寺院の子供たちと。寺院で働く祭司や職員の子供たちです。



ヒンドゥー教徒の中のタミル系の人々の動物供儀です。その場で料理されて、参加した人にふるまわれます。



ヒンドゥー教祭司の妻と子供。ディーワーリー祭の日なので綺麗な服を着ています。



1988年まで政権を取っていたネー・ウィン元大統領夫人と